朝の読書の実践と普及のための活動－1987～1997年度－

薬袋 秀樹
（筑波大学名誉教授）

【要旨】
本研究の目的は、林公が提唱した朝の読書が、船橋学園女子高校で検討されて以後、その実施方法と推進組織が確立されるまでの間（1987～1997年度）、関係者や団体がどのような活動を行ったかを調査し、朝の読書の実践と普及はどのような活動によって支えられたのかを明らかにすることである。この期間の朝の読書に関する文献を収集し、行われた活動とその相互関係を分析した結果、朝の読書の実施のために6項目の活動、普及のために9項目の活動が行われていることが明らかになった。実践面では、学内の教員の支持を得ることができ、普及面では、学校教員以外の多様な人々や自主的な団体からマスコミ等の全国的な団体までの多様な団体による相互に連携した協力や支援を得てきた。朝の読書の実践と普及は、このような多くの人々や団体の相互に連携した活動によって支えられてきたことが明らかになった。

1. 研究の背景と目的

(1) 研究の背景

人々が学校教育や生涯学習の場で学習するには、また、人間らしい感情や生き方を身に付けるには、本を読むことが必要であり、本を読む力を身に付けることが必要である。図書館を利用するにも本を読む力が必要である。人々の本を読む力は様々であるため、本を読む力を伸ばすには、各自の読む力と関心に合った読書の機会を確保する必要がある。

朝の読書とは、小・中・高等学校で、朝の授業開始前に10分間程度、教師と生徒全員が自分の読みたい本を読む読書活動で、本を読むことによって、児童・生徒に読む力と生きる力を与えることをめざしている。10分間行う学校が多いことから、朝の10分間読書とも呼ばれる。①みんなでやる、②毎日やる、③好きな本でよい、④ただ読むだけ、が原則で、朝の読書の4原則と言われている。林公、大塚笑子（当時船橋学園女子高校教員）が中心となって船橋学園女子高校で最初に実施された。

2014年4月28日現在、小学校の80%、中学校の81%、高等学校の43%で実施されている[1)]。子どもの読書習慣を育てる上で効果があると言われており[2)]、山崎博敏等による研究では、学力向上にも効果があることが認められている[3)]。2001年には、「近年最も成功した教育運動といってよい」[4)]と言われている。

朝の読書については、北吉郎による、林公による朝の読書の実践の契機、実践方法、効果に関する報告[5)]、中村豊による大学生への影響の調査[6)]、薬袋秀樹による朝の読書の実施方法[7)]や「心の豊かさ」等を含む朝の読書の効果[8)]の検討の試みが行われている。

現在、朝の読書は停滞しているという意見[9)]がある。朝の読書の今後を考える上で、一つの高校の実践から始まった朝の読書が全国に知られ、他の小・中・高等学校に普及する

過程で、どのような活動が行われたのか、関係者・団体の努力を明らかにする必要がある。この経過に関する文献には、佐川二亮（朝の読書推進協議会事務局長）の「『朝の読書』運動のあゆみ」（2005年）[10]と林、大塚の解説記事があり、総合的にとらえる必要がある。

(2) 研究の目的と方法

朝の読書は、1987年度に船橋学園女子高校で検討され、1988年度に同校で全校実施された。その後、関係者や団体によって様々な活動が行われた結果、1997年度に、『朝の読書実践ガイドブック』の出版、『教職研修』の連載開始、朝の読書推進協議会と朝の読書実践研究会の発足によって、その実施方法と推進組織が確立されたと考えられる。

本研究の目的は、1987年度に検討されて以後、1997年度までの11年間に、関係者や団体がどのような活動を行ったのかを調査し、朝の読書の実践と普及はどのような活動によって支えられたかを明らかにすることである。

この期間の朝の読書に関する雑誌記事と単行書を収集し、それを総合して、朝の読書に関して行われた活動とその相互関係を分析した。なお、佐川は、「運動」の定義を示していないが、同協議会作成の年表には、「1995年9月8日　（中略）林公教諭とトーハン出会う。「朝の読書」の運動化スタート」[11]と書かれている。ここから、基本的に、トーハンによる取り組みを中心とした「運動」を対象としていると考えられる。本研究では、単行書や雑誌記事に現れる研究・学習の成果や朝の読書実践研究会等の組織を含めて、朝の読書を推進するすべての活動を包括して捉えるが、「運動」という用語は用いない。

2. 1987～1997年度の朝の読書の歴史に関する資料

(1) 資料の分類

1987～1997年度の朝の読書の歴史に関する文献を個人・組織別に分類し、番号を付す（末尾の「1987～1997年度の朝の読書の歴史に関する文献リスト」参照）。

まず、高文研（出版社）の出版物には、雑誌『ジュ・パンス』が朝の読書を初めて取り上げた記事（1993年4月、①）、最初の単行書『朝の読書が奇跡を生んだ』の「編集部まえがき」（船橋学園読書教育研究会編著、1993年12月、②）がある。①と②は、船橋学園女子高校での朝の読書の取り組みの経過と実際について述べている。

林公は、朝の読書の提唱者で、「Ⅱ「朝の読書」にたどりつくまで」（『朝の読書が奇跡を生んだ』掲載）（船橋学園読書教育研究会編著、1993年12月、③）、「この本ができるまで」（『続　朝の読書が奇跡を生んだ』掲載）（林公+高文研編集部編、高文研、1996年12月、④）、『婦人公論』掲載の記事（1997年3月、⑤）がある。③は、同書の第2章で、船橋学園において朝の読書が始まるまでの経過を詳しく述べたもので、著者名は記載されていないが、林と推定できる。④は、2冊目の単行書『続　朝の読書が奇跡を生んだ』を出版するにあたって、林が書いた「まえがき」で、『朝の読書が奇跡を生んだ』出版後の経過が述べられている。③と④の対象期間は接続しているため、合わせて、全体の経過が明らかになる。⑤は、一般雑誌に掲載された初期の数少ない記事の一つで、③④にない情報が得られる。

大塚笑子は、同校での朝の読書の最初の実践者で、「第1章　はじめの一歩」（『朝の読書はじめの一歩』（1999年、⑥）があり、主に同校内での朝の読書の開始期の取り組みの経過を述べている。

佐川二亮は、株式会社トーハン（出版取次会社）の社員で、1997年の「朝の読書推進協議会」の発足以来、協議会の事務局長を務めた。雑誌記事（2002年4-5月、⑦）と「「朝の読書」運動のあゆみ」（『「朝の読書」はもう一つの学校』掲載）（2005年12月、⑧）がある。⑧は、朝の読書開始後17年の経過を記念した単行書に掲載されたもので、朝の読書の開始以後の歴史をまとめている。⑦と⑧には共通する内容が多いが、補い合う部分もある。朝の読書推進協議会には、このほかに、単行書の末尾に掲載された2点の同名の年表がある。「「朝の読書」運動の歩み」（『朝の読書46校の奇跡』掲載）（2001年、⑨）、「「朝の読書」運動のあゆみ」（『「朝の読書」はもう一つの学校』掲載（（2005年12月、⑩）である。⑨は1988-2001年、⑩は1988-2005年を収録している。

(2) 資料の特徴

これらの資料の特徴として、次の5点がある。第一に、林は、複数の記事で、朝の読書のための取り組みの経過について述べているが、包括的にまとめた文章は書いていない。第二に、大塚は、主に学校内における朝の読書に関する取り組みと議論について詳しく述べている。第三に、佐川の文章は、一番詳しく、朝の読書の開始以前の時期から対象としているが、トーハンの取り組みと朝の読書推進協議会の発足に重点が置かれており、朝の読書推進協議会の発足以後の活動をほとんど取り上げておらず、同協議会の発足以後の活動の内容が十分明らかにされていない。第四に、佐川は、『朝の読書が奇跡を生んだ』（1993年）以後の単行書と『教職研修』を中心とする雑誌記事による研究・普及活動について触れていない。第五に、年表には、トーハンが援助を行うまでの経過が、朝の読書の提唱と最初の単行書の出版しか記載されておらず、2005年までの年表（⑩）には、メディアパル以外が出版した単行書は記載されていない。

3. 1987～1997年度の朝の読書に関する活動の歴史

これらの文献をもとに、1987～1997年度の朝の読書に関する活動の歴史を整理する。包括的に書かれた文献が少ないため、複数の資料の記述を総合し、活動の実際を示す記述を引用して、出典の資料の番号を注記する。また、資料は、単行書の出版、雑誌記事の連載等の状況について触れていないため、その点を補足する。

(1) 1987年度

船橋学園女子高校で朝の読書が開始されるまでの経過については、「Ⅱ「朝の読書」にたどりつくまで」（③）が最も詳しい。林は、生徒の学習、生活の改善を図る観点から、生徒の意欲を引き出すために、授業で様々な試みを行い、生徒に元気を出させるために、高校生の生き方を取り上げた雑誌『考える高校生』（高文研）の記事や高文研出版の単行書を全員で分担して音読した。このことから、優れた本を読めば、生徒は本を読んで感動することがわかってきた。

林は、すべての生徒ができる限り自主的な形でこのような読書を行える方法を模索していたと考えられる。ある日、このための方法と実践事例に関する文献に出会った。それは、1987年12月に出版されたジム・トレリース著『読み聞かせ－この素晴らしい世界』（高文研）に掲載されているマクラッケン夫妻の「黙読の時間」の4原則[11]であった。林は、この本を購入し、1988年1月17日に読み、最終章の「『黙読の時間』のすすめ」に注目し、18日に、そのコピーを全教員の机の上に配布した。この時、主に次の3つの点に注目した。

第一に、黙読の時間の実践事例である。マサチューセッツ州の公立中学校の実践で、月曜と金曜の午前中、25分間の「黙読の時間」が実施されている。何を読むかは各人の自由で、生徒だけなく、校長、教師、事務職員まで全員が本を手にする。第二に、障害児施設での実践である。多動で読むことを受けつけない子どもたちが、13分間の黙読の時間を心から楽しみにするようになった。第三に、4つの原則である。

林は、すぐに、学校の運営委員会に「全校一斉読書の黙読の時間」を提案した。当時発行していた個人通信で、その必要性を訴えたが、一部の教員から強硬な反対意見が出され、議論は平行線をたどった。

大塚は、以前からホームルームで読み聞かせ等を行っていたので、「『黙読の時間』のすすめ」のコピーを読んですぐ、自分のクラスで朝の読書に取り組んだ。それが成功したため、大塚は、林にその様子を見せ、林がその様子を個人通信で全職員に知らせたため、教員が見学するようになった。大塚は、「次の日の朝からは、次から次へと入れ替わり立ち替わりに先生方が二年四組の「朝の読書」の風景を見学に来るようになりました」(⑥)と述べている。さらに、大塚のクラスの生徒の書いた感想文のコピーも全教員に配布された。

その結果、3月中旬の職員会議で、4月からの実施について、「全員の合意」(③)が得られた。高文研編集部は、「クラスをもっている先生が、まず“実験”をやってくれたのだ。そんなクラスが、二つ、三つと増えていった。そして、最後の決断をくだしたのが村田校長だった」と述べている(①)。

(2) 1988年度

朝の読書の開始以前からの経過については、林が報告している(⑤)。1988年4月、船橋学園女子高校全校で朝の読書が正式に開始された。この後、1992年までの5年間、朝の読書は順調に続けられた。林は、「こうして出発した私たちの学校の全校一斉「朝の読書」は、さしたる障害もなく順調に続けられ、5年目が終わろうとしていた1月のある寒い日のこと、(中略)ふと気付いたのです。あれほど真剣に取り組んできた「朝の読書」について、何一つ記録が残されていないことに。(中略)全力を注いできた実践なのに、記録が何もないというのも寂しい」「私は(中略)自分の授業で「朝の読書について」思うところを自由に書かせたのです。卒業を目前に控えた3年生でした」(⑤)と述べている。

林は、この「生徒たちの感想文を高文研の編集部に送り届けた」(④)。高文研は、「2月のある日、分厚い封筒が届いた。中には先生の手紙と(中略)高校生たちの感想文が2クラス全員分」(①)入っていたと述べている。高文研は、当時、高校生と高校教員を読者とする月刊誌『ジュ・パンス』(旧誌名『考える高校生』)を刊行していた。林は、朝の読書に取り組む以前に、授業で『考える高校生』の記事を読んでおり、高文研出版の『読み聞かせ』を参考にしたため、その成果を高文研に知らせたかったものと考えられる。

(3) 1993年度

送られた原稿に応えて、編集部が同校を訪問して取材を行い、特集記事を組み、『ジュ・パンス』1993年4月号に「特集　高校生たちを本好きに変えた学校ぐるみの読書運動」、8・9月合併号に山崎悦朗(安城学園高校教員)の「朝の10分間読書を試みてみたら」[13]という記事が掲載された。山崎の記事は、4月号の記事を読んで、同じ女子高校である愛知県の安城学園高校で短期間実験的に取り組み、成功を収めた結果の報告である(②)。他校での朝の読書の実践に関する最初の文献は、この4月号の記事と考えられる。のちに朝の読

書に取り組む中川治子（三重県立津工業高校教員）は、この記事を読んで問題意識を持ったと述べている[14]。

この記事がきっかけになったと思われるが、この年の12月、朝の読書の開始約5年半後の1993年12月、船橋学園読書教育研究会編著『朝の読書が奇跡を生んだ』（高文研）[15]が出版された。これが朝の読書に関する最初の単行書で、雑誌掲載後8か月で出版されている。4章からなり、「Ⅰ　本好きになった生徒たち」「Ⅱ　「朝の読書」にたどりつくまで」「Ⅲ　教師たちはどう考え、どう実践したか」「Ⅳ　3年1組全員の「朝の読書」感想」がある。Ⅰは、朝の読書の現状と生徒の反応の報告で、Ⅱ、Ⅲは、朝の読書の実施に至る経過である。Ⅱでは、林は匿名でA先生となっている。Ⅲは、6人の教員の座談会で、林は司会を務めつつ発言している。Ⅳは、生徒の感想文である。

同書の出版が契機となって、朝の読書が広く知られることとなった。12月30日の『朝日新聞』の「天声人語」で朝の読書が取り上げられた。題名は「朝の読書体験」[16]で、「一冊の本を読んだ。船橋学園読書教育研究会編『朝の読書が奇跡を生んだ』である。珍しい試みだ。毎朝十分間、全校の高校生が本を読む。好きな本を開いて黙読する。六年前から続けている」「「始めてみたら成果は想像以上でした」と、推進役の林公（ひろし）さんは言う」とあり、朝の読書の概要と生徒の感想が紹介されている。この記事のことは、2(1)で挙げた④以降の資料には記載されていない。

この記事はかなりの影響を与えている。のちに10分間読書に取り組む野田芳朗（東京都大田区立道塚小学校教員）は、「「天声人語」を目にして、思わず「これだ！」と叫んでしまった」[17]と述べている。この記事によって、朝の読書は、全国に、教育界だけでなく、社会全体に知られたのである。

林は、この後の状況について述べている（④）。同書が出版されてすぐ、野田芳朗、宮脇隆志（神奈川県立大沢高校教員）、田村孝之（千葉市立千城台南中学校教員）、千葉県白井町立白井第二小学校の教員から鋭い反応があった。大田区立道塚小学校の教員野田芳朗のクラスでの実践が、船橋学園女子高校とともに、『毎日新聞』1994年3月24日の記事[18]で紹介された。

(4) 1994年度

彼らに励まされて、林は、1994年6月に月刊の情報交換誌『子どもたちの未来へ』を発刊したが、その後の状況について「それ以後はさほどの反響もなく、（中略）本の部数も期待したほどは伸びず、私たちの実践もさして話題を呼ぶことなく忘れ去られようとしていました」（④）と述べている。なお、8月、秋田の全国学校図書館研究大会に朝の読書の実践を紹介する講演の講師として、大塚が招かれ（④）、大塚は、『学校図書館』にその報告[19]を執筆している。

次に、朝の読書が知られる契機となったのは、1995年1月に、林がＮＨＫラジオ第2放送「教師の時間」で、「朝の読書が生徒を変えた」と題して40分間話す機会を得たことである。林は、大塚から、参考のために送られてきた全国学校図書館研究大会資料の参加者名簿をもとに、放送案内のハガキを出した（④）。枚数は「2000枚ほど」（⑤）である。

ハガキを受け取ってラジオを聞き、お礼の便りを送ってきた人も数人いた。鈴木明美（秋田県西木村西明寺中学校教員）は、偶然ラジオを聞き、林に手紙を送った。林が、前半部分を聞き逃した鈴木のために録音テープをダビングして送ると、すぐお礼の返事が来て、

教師全員分ダビングして配り、みんなが聞いて、すぐ全校一斉に取りかかると書かれていた（⑤）。林は、鈴木の「一通の手紙が、私に、全国の小・中・高校すべてに案内のハガキを出す決意をうながしたのです」と述べ、以後、大塚と協力して、「ほぼ 2 年間、全国 4 万を越える小・中・高校にハガキを出し続け」（④）、約 300 人から返事があった（⑤）。

(5) 1995 年度

これ以後の出来事については、佐川の解説が詳しく（⑦⑧）、林は主に個人の活動について述べている（④⑤）。

この年、トーハンの協力が始まった。トーハンは、積極的に読書推進運動に取り組んでおり、1995 年の 4 月 25 日に、ＲＦラジオ日本に、当時の役員が出演して、船橋学園女子高校の取り組みを紹介している（⑧）。

鳥取県の老舗書店である今井書店グループが、米子市に「本の学校」（代表・永井伸和）を設立し、その設立記念事業として「本の学校大山緑陰シンポジウム（21 世紀へ向けて出版文化を考える）」を 5 年間開催することになり、9 月に第 1 回が開かれた。林は、知り合いの図書館関係者から誘われ（⑦）、学校図書館の分科会のパネリストとして招かれ、朝の読書の実践について発表した（⑧）。

これが、林と佐川が出会うきっかけとなった。これを縁として、トーハンは、林に協力を申し出て、受け入れられた。佐川は、「トーハンは、躊躇することなく林教諭に活動の支援を申し出た。林教諭も予想をしなかった支援者の出現に喜びを隠せない表情を見せた。(中略)その日から学校関係者はもとより、より多くの人に「朝の読書」の実践の素晴らしさを知ってもらうため、マスコミ関係への強力な働きかけが始まった」(⑧) と述べている。

(6) 1996 年度

林は、9 月に開かれる「第 2 回大山緑陰シンポジウム」では、1 分科会として「広げよう、朝の読書～生徒が変わる、教師が変わる、学校が変わる」を設けさせてもらったと述べている（④）。佐川は、この会合に向けて、参加者に理解とアピールを促すための資料と媒体を得るためにテレビと新聞に取材を働きかけた（⑦）。当時、トーハンはＮＨＫ・ＢＳ「週刊ブックレビュー」の制作に協力していたため、同番組に「朝の読書」の取材を相談し、神奈川県立大沢高等学校（現相模原総合高等学校）の朝の読書の取り組みが 1996 年 6 月 16 日に放送された（⑧）。また、『東京新聞』の知人を説得し（⑦）、1996 年 7 月 3 日、見開き 2 ページの「こちら特報部」の記事[20] で、千葉県船橋市立船橋中学校の朝の読書の取り組みが大きく取り上げられた（⑦⑧）。

江藤淳（文芸評論家、日本文藝家協会理事長）が、この記事を読み、7 月 10 日のＮＨＫ教育テレビの「視点・論点」で、「10 分間の読書」と題して、朝の読書を評価し支援を訴えた。佐川は、その後、江藤に働きかけ、「新聞広告」の掲載に向けて取り組んだ。「放送後、すぐに江藤氏に電話を入れ、御礼と林教諭との対談をお願いした。江藤氏は「朝の読書を全面的に応援します」と快諾」したと述べている（⑧）。対談の内容は、同年 11 月 4 日の朝日新聞広告特集「青春の読書～『朝の読書』がもたらしたもの」[21] として掲載された。これは、朝日新聞東京本社広告局と広告代理店博報堂の協力による企画である。佐川は、全国の学校関係者に朝の読書を認知させる強力な宣伝媒体となり、後年の各紙の朝の読書広告特集へ発展する契機となったと述べている（⑧）。この後、同じ形式の広告特集が定期的に掲載されている。なお、『朝日新聞』掲載の対談は抜粋で、全文は『新刊ニュース』

12月号[22]に掲載されている。

9月8日「第2回大山緑陰シンポジウム」が開かれ、この1分科会として、「広げよう、朝の読書～生徒が変わる、教師が変わる、学校が変わる」が設けられた。林は、『こどもたちの未来へ』の第1号から第30号までを基礎資料として、「事実上の「朝の読書全国交流会」のスタートを切る」ことになったと述べている（④）。この後、林は次のように述べている。「これを皮切りに、私は、今後の4年間、20世紀中に、月1回の割合で全国を都道府県単位で回る「朝の読書全国行脚」に踏み切ることを決意しました。分科会に集まってくださった全国の先生方の苦しい現場からの報告と熱い期待が、私にその決意をうながしたのです。私（たち）の進むべき道は、この時点で決まったような気がします」（④）。これを契機に、林は全国各地で講演を行うことになった。

10月16日に、第44回菊池寛賞（日本文学振興会主催）の「『朝の読書』運動（提唱者：林公教諭）」の受賞が決定して新聞で報道され、12月6日に贈呈式が行われた。受賞には江藤の力が大きかったようで、佐川は、「江藤氏の「朝の読書」に対する思いと期待は厚く、江藤氏の強力な推薦によって（中略）菊池寛賞が林教諭に贈られることになった」（⑧）と述べている。

12月に朝の読書に関する2冊目の単行書である、林公＋高文研編集部編『続　朝の読書が奇跡を生んだ』（高文研）[23]が出版された。全部が実践事例で、小学校の部4校、中学校の部4校、高校の部5校の実践事例を収録している。事例のほとんどは、ハガキに応えて、実践に取りくんだ学校である（⑤）。林は高文研編集部とともに編者を務め、「この本ができるまで」を執筆している。本書によって、初めて、朝の読書の多数の事例が詳しく紹介された。小・中・高等学校の事例が揃い、1校当たり10数ページずつ詳しく解説されており、朝の読書の取り組み方のマニュアルとしても利用できる。都市部と地方など多様な地域の事例を収録しており、読者は、それぞれの地域や学校の事情に応じて、最も近い事例を参考にすることができる。本書によって、朝の読書の具体例、実施方法を知ることができるようになった。

(7) 1997年度

5月に3冊目の単行書、林の最初の単著『朝の読書実践ガイドブック』（メディアパル）[24]が出版された。これは、朝の読書の意義と4原則の解説、朝の読書がもたらす効果、典型的な疑問に対する回答、具体的な進め方のポイントと工夫を非常にわかりやすく書いた約80頁（本文64頁）の冊子で、活字も大きく、大変読みやすい。朝の読書の実施方法に関する最もよくまとまった資料で、朝の読書への取り組みを検討する際に非常に役立ったと思われる。同じく5月に、雑誌『教職研修』（教育開発研究所）で、林の連載記事「生きる力を育む「朝の読書」」の掲載が開始され[25]、長期にわたる連載が始まった。これを通じて、朝の読書の考え方が深まり、多くの実践事例が紹介される。

7月、朝の読書推進協議会が発足した。代表は林公、副代表は大塚笑子、事務局長が佐川二亮であった。事務局はトーハン広報室に置かれた。佐川は「トーハン広報室には常にテレビや新聞、雑誌、広告代理店等のメディアとの交流があり、日常の業務の中で「朝の読書」の広報・宣伝・広告等を便乗させることができた」と述べている（⑦）。なお、2000年3月に大塚が理事長に就任している（⑧⑩）。

8月に、「第2回朝の読書全国交流会」（秋田県角館町）が開催された。

1998年1月には、朝の読書を実践する教員によって、朝の読書実践研究会（代表世話人林公）が発足した(⑨)。

このように、朝の読書に関する活動も複数の組織を持つことになった。

4. 朝の読書の実践と普及のための活動の分析

(1) 活動の種類と関係者

以上の経過を分析すると、まず、朝の読書の実践のために次の活動が行われた。1. 授業の中で本を読む試み（本の輪読、詩の朗読）、2. それを発展させる考え方と実践事例の認識（『読み聞かせ』）、3. 新たな試みの試験的実施（大塚による実施）、4. 成果の確認（見学と生徒の感想文）、5. 本格的実施（全校実施）、6. 成果の確認（生徒の感想文）。次に、朝の読書の普及のために次の活動が行われた。1. 雑誌記事の掲載（『ジュ・パンス』）、単行書の出版（『朝の読書が奇跡を生んだ』等）、2. 情報交換誌の発行（『子どもたちの未来へ』）、3. 研究会の結成（朝の読書実践研究会）、4. 新聞、ラジオ、テレビ等での報道、5. 研究会等での発表（全国学校図書館研究大会、大山緑陰シンポジウム、朝の読書全国交流会）、6. 全国的な広報活動（ハガキの送付）、7. 有力な支持者による発言（江藤淳等）、8. 全国的な推進組織の設立（朝の読書推進協議会）、9. 行政、マスコミ、関係機関への働きかけ。社会で広く知られるために必要と思われるすべての活動が行われている。

これらには、次の個人と団体が関係している。支援者では、高名な文芸評論家である江藤淳（評論家）、鳥取県の今井書店グループの永井伸和、出版社では初期の高文研、後期のメディアパル、出版関係団体ではトーハンと佐川二亮、メディアでは、『朝日新聞』（「天声人語」「広告」を掲載）、『毎日新聞』、『東京新聞』のほか、ＮＨＫ（ラジオ第２放送、ＢＳブックレビュー）等が取り上げている。

(2) 活動の意義と特徴

朝の読書は、実践面では、一人の教員による授業の改善の試みから始まり、学内の教員の支持を得て、全校の取り組みへ発展している。普及面では、学校教員以外の多様な人々や自主的な団体から全国的な団体までの多様な団体による相互に連携した協力や支援を得てきた。これらの活動の結果、朝の読書は、広く社会に知られ、多くの学校に普及するようになった。朝の読書の実践と普及は、多くの人々や団体の相互に連携した活動によって支えられてきたのである。

朝の読書の基本的な特徴として、次の２点を指摘することができる。

ア　朝の読書の最初の目的は、読書普及ではなく、生徒に生きる力を与えることであった。

イ　朝の読書を開始する際に最も参考になったのは、アメリカの学校で行われている「全校一斉読書の黙読の時間」である。

朝の読書の実践と普及のための活動の特徴として次の６点を指摘することができる。

ア　朝の読書に関する活動の歴史については、集会や団体の活動の歴史と、単行書の出版、雑誌記事の発表等の出版活動を統一して捉える必要がある。

イ　朝の読書が実現する上で、朝の読書の考え方や方法を理論的に組み立てた林と最初に実践した大塚の２人の教員の協力が大きかった。

ウ　実践の成果を社会に普及させる上で、高文研、メディアパルという２つの出版社の存在が大きかった。特に、高文研は、朝の読書の実施の契機となった『読み聞かせ』を

出版し、雑誌『ジュ・パンス』の記事で初めて取り上げ、『朝の読書が奇跡を生んだ』正・続という広く注目された本2点を出版し、非常に大きな役割を果たしている。特に、『続　朝の読書が奇跡を生んだ』は、最初の事例集として極めて重要である。

エ　『天声人語』や江藤淳による支持は大きな影響を与えたと考えられる。これらの人々の支持によって、社会における評価が高まったと考えられる。

オ　トーハンが支援したことは非常に大きな影響を与えている。林と江藤の対談、『朝日新聞』の広告特集、新聞社・テレビ局の取材は佐川の働きかけによって実現しており、朝の読書推進協議会の発足とその後の活動等はトーハンによって支えられている。学校現場の取り組みと大手の出版取次会社の連携・協力が実現した意義は大きかった。ただし、何事にもプラス面とマイナス面があり、佐川の報告は、トーハンと朝の読書推進協議会の活動が中心で、朝の読書がトーハン中心の事業であるかのような印象を与える恐れがある。大手の出版取次会社2社のうち1社が取り組んだことの問題点は検討されておらず、今後、検討の必要がある。

おわりに

本稿では、様々な資料の内容を総合することによって、朝の読書の実践と普及のための活動の全体像を明らかにすることを試み、これまでまとめられていなかった歴史をある程度明らかにすることができた。今後、林を中心とする学校現場の取り組み、研究会等の団体の取り組みの研究が必要である。朝の読書に関する単行書や雑誌記事、情報交換誌、研究会等が果たした役割については、今後研究する予定である。

注記・引用文献

1）朝の読書推進協議会「「朝の読書」全国都道府県別実施率　平成26年4月28日現在、朝の読書推進協議会 調べ」(朝の読書推進協議会『広げよう朝の読書』http:wwwl.e-hon.ne.jpcontentk46-0215.html、2014年4月29日参照)

2）上條晴夫『子どもを本好きにする読書指導50のコツ』学事出版、1996、pp.13

3）山崎博敏編著『学力を高める「朝の読書」』メディアパル、2008、79p.朝の読書の実施は、小学校の国語と算数及び中学校国語の学力に対して有意な影響を与えていることが明らかになっている。

4）紀田順一郎「「朝の読書」の社会的な意義」朝の読書推進協議会編『朝の読書46校の奇跡』メディアパル、2001、pp.12

5）北　吉郎「「朝の読書」教育 - 林公氏の教育実践の契機」（『高知大学教育実践研究』19、pp.27-36、2005）、「「朝の読書」教育 - 林公氏の船橋学園女子高等学校での実践」（『高知大学教育実践研究』20、pp.23-31、2006）、「林公氏の「朝の読書」教育 - なぜ、「奇跡」的な成果がもたらされたか」（『高知大学教育実践研究』21、pp.15-24、2007）

6）中村豊「「朝の読書」に関する縦断的研究の試み」（『日本生涯教育学会論集』31、pp.73-82、2010）

7）薬袋秀樹「朝の読書にどう取り組むか」(『教職研修』35(6)、 pp.94-97、2007）ほか。

8）薬袋秀樹「朝の読書の効果に関する議論について」(『日本生涯教育学会論集』31、pp.23-32、2010)、「朝の読書の評価に関するアンケート調査」(『日本生涯教育学会論集』33、pp.103-112、2012)

9）「「朝読運動」活性化探る」『中国新聞』2009年9月13日　塩見裕子広島県立広島皆実高校教諭の話「朝読が風化しつつあるとの危機感がある。」

10) 佐川二亮「「朝の読書」運動のあゆみ」朝の読書推進協議会編『「朝の読書」はもうひとつの学校』メディアパル、2005、pp. 24-35
11) 朝の読書推進協議会「「朝の読書運動」の歩み」朝の読書推進協議会編『「朝の読書」はもうひとつの学校』メディアパル、2005、pp. 109
12) トレリース、ジム『読み聞かせ-この素晴らしい世界』高文研、1987、pp. 255-267
13) 山崎悦朗「朝の 10 分間読書を試みてみたら」(『ジュ・パンス　教師版』125、pp. 26-27、1993)
14) 中川治子「国語の教師でよかった！」林公＋高文研編集部編『続　朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1996、pp. 188
15) 船橋学園読書教育研究会編著『朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1993、pp. 43-75
16)「天声人語　朝の読書体験」『朝日新聞』1993 年 12 月 30 日、1 面。
17) 野田芳朗「「10 分間読書」で子どもも教師も幸せな気分」林公＋高文研編集部編『続　朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1996、pp. 17
18)「朝の 10 分読書、本好き増えた　小学校６年、3 カ月で定着－広がる船橋学園の試み」『毎日新聞』1994 年 3 月 24 日。
19) 大塚笑子「朝の読書はどんな奇蹟を生んだか：千葉県・船橋学園女子高等学校」(『学校図書館』537、pp. 30-32、1995)
20)「「朝の読書」学校変えた」『東京新聞』1996 年 7 月 3 日。
21)　江藤淳、林公[対談]「青春の読書『朝の読書』がもたらしたもの」『朝日新聞』1996 年 11 月 4 日。
22) 江藤淳、林公「対談『朝の読書』がもたらすもの」(『新刊ニュース』557、pp. 8-19、1996)
23) 林公＋高文研編集部編『続　朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1996、221p.
24) 林公『朝の読書実践ガイドブック』メディアパル、1997、79p.
25) 林公「今、たった一人の力が必要なとき(生きる力を育む「朝の読書」１)」(『教職研修』25(9)、pp. 114-116、1997)

1987～1997 年度の朝の読書の歴史に関する文献リスト

① 「特集　高校生たちを本好きに変えた学校ぐるみの読書運動」(『ジュ・パンス　教師版』121、pp. 22-25、1993)
②「編集部まえがき」船橋学園読書教育研究会編著『朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1993、pp. 7-15
③「Ⅱ「朝の読書」にたどりつくまで」船橋学園読書教育研究会編著『朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1993、pp. 43-75
④林公「この本が出来るまで」林公＋高文研編集部編『続　朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1996、pp. 9-14
⑤林公「全校一斉「朝の読書」運動が夢を広げた」(『婦人公論』82(3)、pp. 227-233、1997)
⑥大塚笑子『朝の読書はじめの一歩』メディアパル、1999、pp. 4-20
⑦佐川二亮「全国の学校に広がる『朝の読書』(その１)(その２・完)」(『紙・パルプ』52(4)、pp. 8-12、2002)(『紙・パルプ』52(5)、pp. 4-10、2002)
⑧佐川二亮「「朝の読書」運動のあゆみ」朝の読書推進協議会編『「朝の読書」はもうひとつの学校』メディアパル、2005、pp. 24-35
⑨朝の読書推進協議会「「朝の読書」運動の歩み」朝の読書推進協議会編『朝の読書 46 校の奇跡』メディアパル、2001、pp. 114-115
⑩朝の読書推進協議会「「朝の読書」運動のあゆみ」朝の読書推進協議会編『「朝の読書」はもうひとつの学校』メディアパル、2005、pp. 108-109